

ユーカリ樹についての資料より

柿原小学校で学んだ人にとってユーカリの大木は忘れられない記念樹となっています。でもそのルーツは知らない人が多いのではないかと思います。そのいくつかの謎を解く資料が残っていました。次の資料は、残っていたメモ書きを元に文章化されたものです。

柿原小学校を卒業した人なら絶対に忘れられぬ名物としてユーカリの巨木をあげるでしょう。ユアラの食料として名声を高める遙か以前の銘木が本校のユーカリである。この木が今どうして運動場の中央にあるのか、そのルーツを探り知っておくことは柿原小学校ゆかりの人には、きわめて大事であると思い、文章化した。(T氏の手記を柱としてまとめた)

話は明治の中頃にさかのぼる。学校沿革史によれば明治7年に柿原小学校は創立している。所は阿波郡柿島村の中央で現在の敷地である。寄せ棟の木造校舎が落成したものの義務教育のお触れには無関心の村人達は、新式の寺子が肌に合わず、生徒達はあまり集まらなかったようだ。さて、その時の校地の周りを何で囲うかが事の始まりで、ジャキチの生け垣か、練り堀か迷ったらしい。結果は全く違う土手で囲うことになった。これがユーカリに発展する原因ということである。

柿原小学校の校地の周りは結局、土手で囲まれ、芝を植えて仕上げられた。ところが校地内は湿気が強く、校舎の下から地下水が吹き出て、水がたまるほどであった。運動場も同様に冬くらいしか使えない。この水が校門の脇から抜けて県道を横切り、溝を伝って谷の低地から吉野川沿いの用水へと流れていくほどだった。そこで、「何か水をよく吸う木はないもんか。」と皆で考えた。結果「オーストラリアにユーカリという木があって、よく水を吸い上げ、成長が早い。その木がいい。」という話になって役場が注文することになった。ところが南半球の端から輸入した木だから神戸の税関でひともめし、徳島の港でまたひともめしたため柿原へはなかなか届かない。やっと到着したときは、「なんぼ強い木であっても枯れてしまうわ。」と役場もしびれを切らしたほどだった。そこで役場に頼まれたTさんが警察署長の許可をもらって徳島の港へ受け取りに行くことになった。

ユーカリの苗木は谷名の船頭、Iさんの帆掛け船で吉野川を通過して、徳島の水上署から持って戻った。当時は柿原堰もなく、イクイナという平底の帆掛け船が島田前についていた。やっと舶来の樹が着いたものと思った通り100本のうちほとんどが枯れ芝のようになっていた。「枯れ芝のようなものでも、もともと強い樹だから試しに植えてみよう。」ということで学校の周りの土手に植えると約30本ぐらい元気を取り戻した。ユーカリの樹は、臭くて蚕の害になったり、大木になるので農作物が日かげになって育ちにくいということから、校舎の北と西側の植え付けは中止した。大正の初め頃、一条からでもユーカリの樹が見えたほど成長は早かった。どの樹もマルマルと太り、キョンキョン高く、よく育った。中でも正面の土手のユーカリがすごかったらしい。

ユーカリは年2回花が咲くらしい。冬の寒空にうす黄緑色の花が枝いっぱい咲いている。当時はこの実を爪先でコマにして回したり、もじいた葉をくすべて蚊取りにしていたらしい。幹の皮は薄く、自然にはがれやすく、緑色の木肌がよく見える。校庭には、2本のセンダの大木が、薄紫の花を咲かせて涼しい日かげをつくったり、ユーカリの間には、ポプラなどがあった。玄関の右側のモチの木は、目白をとるために誰かがよく皮をはいでいた。左手には大きなソテツがあり、上級生が古釘を持ってきてよく打ち付けていた。中庭は、多くの草花が植えてあり、立入禁止であった。大正13年に阿波中学校ができて、校舎の半分を中学校が使っていた。晩年の父は、玄関前の石段につくなみ、キセルでたばこを吹かしながら「あの樹は、わしが植えたんぞ。」と正面の一番でかい樹を指さしてよく言っていた。「おまえもあの樹みたいに大きくなれえよ。」とよく言われたことを憶えている。

ユーカリは外国産だけに本当に珍しく、近隣の木々の評判が高かった。私は小柄であったから、ユーカリに負けないよう大きな体になってやろうと懸命に努力をし、ちっとは大きくなった。けれども、「人としての大きさ」の方は残念ながらユーカリにはかなわなかった。

今の柿原小学校は何もかもが様変わりをしている。なつかしい2本のセンダ。そしてオンリーワンのユーカリ(おそらく裏庭の1本に違いないだろう。)

「ユーカリ」それは柿原小学校で学んだ人々にとっては終生、郷愁を誘う樹であることは確かである。いつまでも元気に育ってほしい。